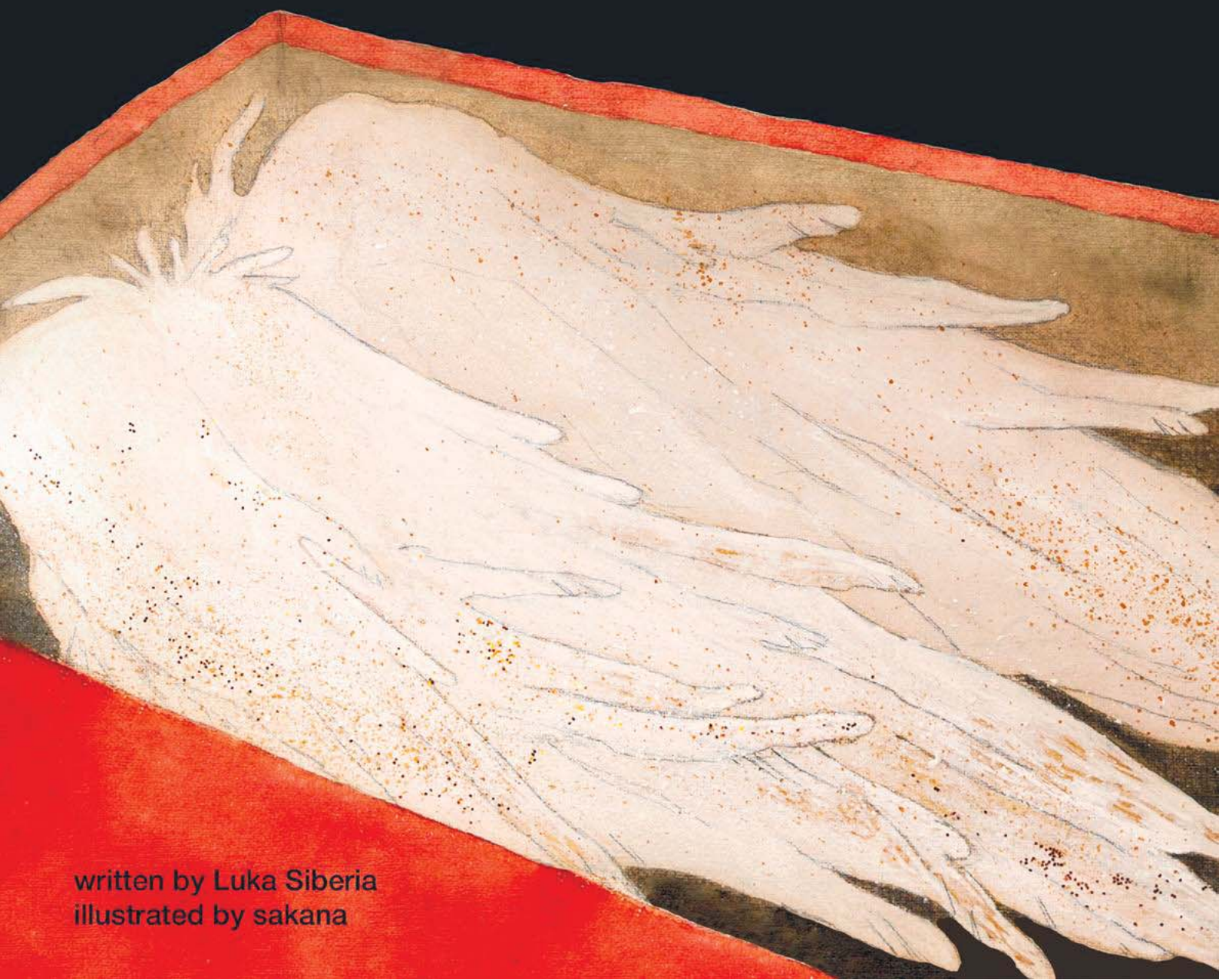


箱にの翼



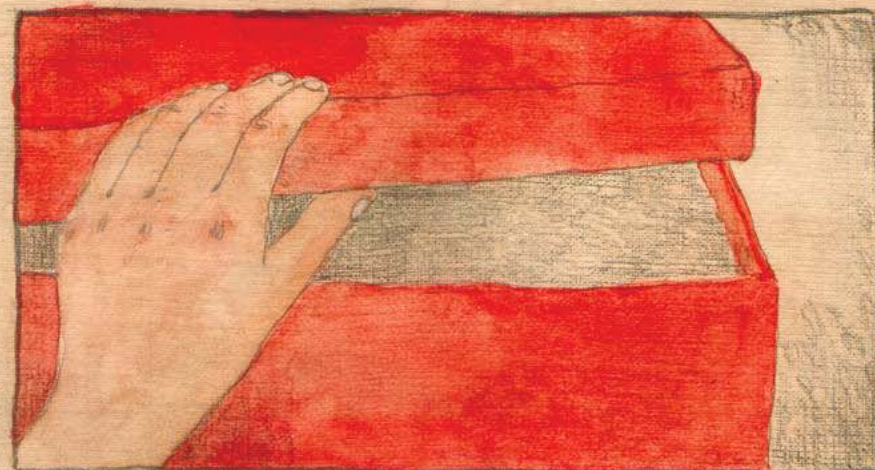
written by Luka Siberia
illustrated by sakana



でも、おかしいことは
ないでしょう。
だって、自分の周りに
気づくものはめったに
ないから。



今まで箱に気付
かなかつたのは
おかしい・・・



これは母の翼だ
った。今までは
見たことないけ
ど、疑う余地が
ない。



これは極め
てきれいな
翼だった。



触り心地は最高の絹よりも柔らかい。
そして、その外見の維持にはに努力なんて知らないことをちゃんと知っていた。
僕の翼はまったく一緒だった。

箱に何日間入っていたのかな？箱に収まって少なくとも10年、いや、もっと経ってきたはず。



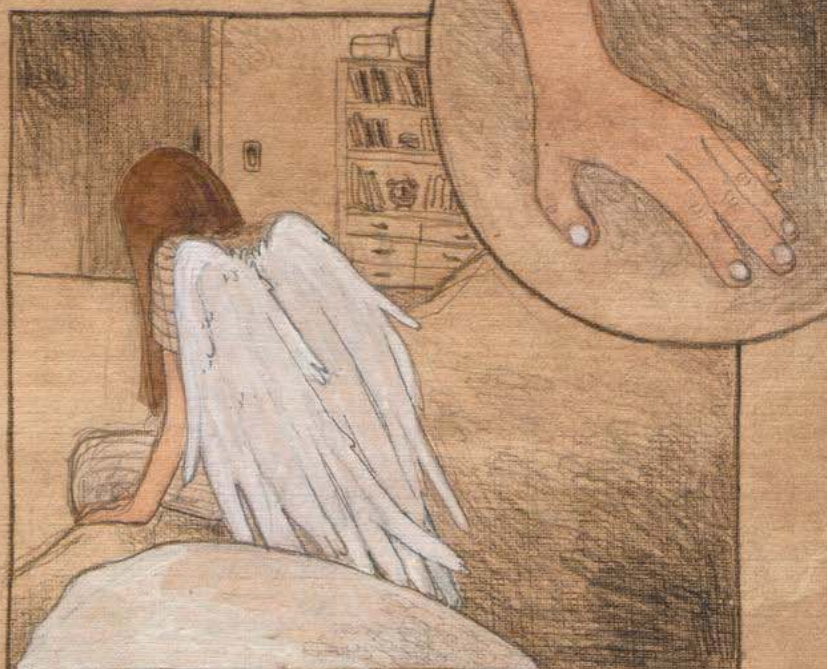
驚いたよ。
だって、母は昔からのメッセー지를大切にしている感情家ではなかった。



母は動きと大志こそ命であると繰り返すことが好きだった。



この雪白で
薄金色の繭
にいて、



小羽の素朴な
香りを吸いな
がら

何も聞こえな
いことは非常
によかった。



まさに何も
聞こえなか
ったよ。

校内にいた時、
特ににぎやか
になつていた休憩の
時に翼にくるまれた
いとよく思つていた。



勉強は
好きだったけど、
クラスメイトと
そのコミュニケー
ションのやり方は
恐ろしかった。



小学校は
友人や知り
合いが多
かった。

いつも
誰かが僕の
翼をじつくり
見たかった。

いかに否定しても
気取つて振る舞つ
ても、

僕の翼が本当に
きれいと認めざる
を得ない。

ただ、
翼は僕の
唯一の特徴
でもある。





僕はお世辞が
好きだった。

優しい言葉を
聞いて笑って、
ほんの少しの
温かさを返す
のは大技。



子供の頃は
得意だったけど、
年を取ると笑え
なくなった。

幼児の頃、コミュ
ニケーションが大
好きだった。

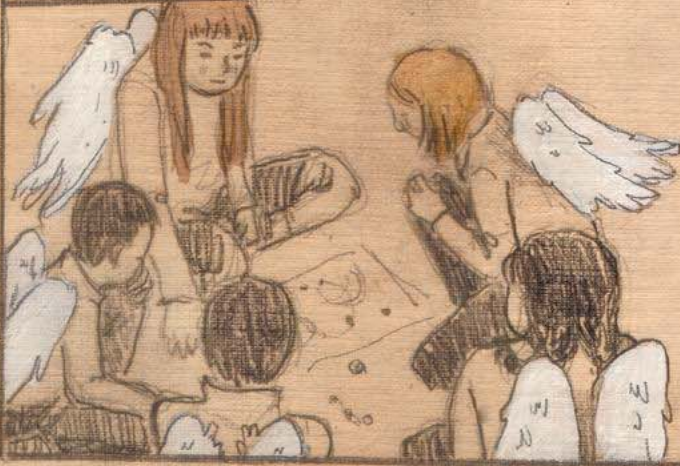


いじわるせー。

お祖母ちゃん
はほぼ毎週週末僕
を連れて訪問し
ていたけど、

訪問先には多くのガ
キが集まっていた。

その中、僕が一番年
上だったから、隣の
部屋へ遊びに行く時
僕は重大な責任を
負われていた。



僕は当時「責任感を持つとは大人らしい」と思っていた。



子供の頃、誰もが
大人の秘密の世界を
夢見ていたけど。

いつかその一部
になると想像も
つかなかった。

これはいつも奇妙な
経緯の下で想定外に、
そして、偶然に
起こる。

ある日、僕が
大人だと宣言
された。

そして、僕は責任を恐れるようになった。

用事が雪崩のように押し寄せるようになったら僕は脅えた。そして、タイミングよく自分の翼を思い出した。

カートウーンの愛好もいきなり「かわい癖」となった。

数年に渡って使ってきた香水は何かの理由で「大人の女性の飾り」となって、

あの雪崩が崩れて翼を相当に凹ませたにも関わらず、

一方、僕はもう安全だった。

翼はいつも僕を助けていた。

この翼は僕が読んでいたファンタジーの世界と違う大きくて怖い世界から守るように僕の背中に育っていた。

大人は翼を
もつことはない。



母は、翼を勝手に
使う子供として
生まれるか大きくて
退屈な大人として
生まれるしかないと
説明していた。



あかちゃん



大人さん

僕はこの
オプシオンに
納得していた。

でも、真実を知って
残念だった。飛べる
人が年を取って自分
の翼を外すことを
知ったのだ。



「翼は正しいこと邪魔」と説明されていた。

あのことが一体
何だと今でも理解で
きず、翼がいかにそ
の邪魔になっっている
かはなおさらだ。



そして、学校7年生の頃、
女性のクラスメートは
翼抜きで登校した。



他の子は彼女に寄っ
て「どうしたのか」
とか「いかにどう
して起こったか」
と聞いていた。



彼女は・・・

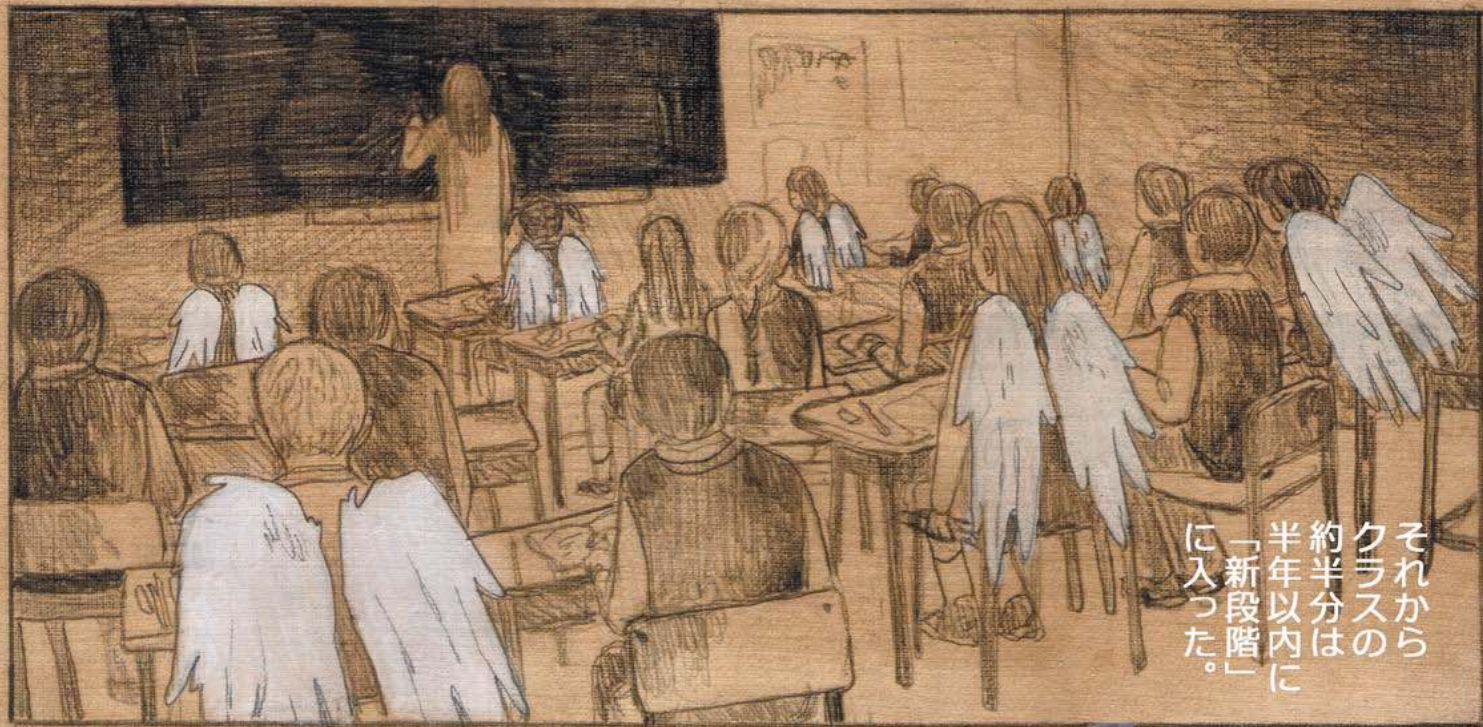
「人生の新段
階に入った」

・・・と疲れそう
に答えていた。



彼女の言葉の意味
を分かった人はい
なかったけど、

それは分かりにく
ひいて、正しく
聞こえていた。



それから
クラスの
約半分は
半年以内に
「新段階」
に入った。

一方、友人と僕は
急いではいなかった。
当面、他人の意見を
気にしなかった
からだ。

しかし、ある時から
友人はいきなり相次いで
自分の翼を外し始めた。



彼らは幸せて
自由に見えていた
けど、緊張感も
読み取れていた。



僕は、
僕がいらない
時彼らは翼を
地面に引き留
める重りと
呼んでいた
ことを知って
いた。





外では翼の
付いた僕は
しばしば冷たい
視線を浴びる。

大人は批判の
こもった目を
向け、現代の
若者の未熟さ
について何か
ひそかに嘆く。



親達の視界
から抜けた
子供はすぐ
僕を指差して
野次る。

尚、やはり翼の
大人もいる。

彼らは背中を翼で軽く叩きながら
世界を穏やかに見回って、雲の
頂上で建てられた金のクボミを
目指して飛ぶ。

翼の付いた誰もがあそこに飛ん
でこうとしている。

しかし、マシユマロのような雪白の
雲が飛べる人を気に入らない憎みに
溢れた雷雲に変貌できることは誰もが
知っているわけではない。

彼らは落ちて
潰したり翼を
折ったりして、
傷を癒してから
再び離陸しよう
とする。

翼を外すと人生は
はるかに簡単になる。

たまに、翼の付いた人がど
うなっているかを確認しよ
うと空を見るけど、目的
地に飛び来る人がいれば、依
然として飛べようとする
人もいる。

一方、自分は
地上でいい。

翼外しを恐れる人もいる。

自分のユニークさを長々
と述べ立てながら自分の
翼を前面に出す人は羽が
摘み取られて、使い物に
ならない小っちゃいな翼
を持つ。

また、翼で
身を隠す
人もいる。



周りの空気が淀みすぎて、
騒音が圧迫して、
言葉が用紙の端
より痛める時、

翼を振るって
最後に広げて
しっかりと自分を
抱くことも
できる。

僕、いや、
彼らは翼を外す
必要はない。

翼を傷つける
可能性があるなら
飛行の意味は
どこにあるのか。



周りの人は
僕が翼で身を
隠したら何も
聞こえないと
思っている。

これが
真実だとの
ふりをする
ことは好き。

ガム

話したり、
聞いたり、
見たり、考
えたりしたく
なかった。

母は、大声で僕を
数回呼び出した。

やはり、
こっちに
いたか。

でてくれよ、
だんまり
屋ちゃん。

失礼なことを
やめてくれないか。

僕は目線を母に
合わせた。

母はいつもリラックス
して穏やかに見えて
いたけど、こののんき
な外見を立てるには
母にとつてどれだけの
努力が必要だったかを
僕は知っていた。

あ、これをもう
忘れたわ。

でも、今これ
について思った
ばかりと気が
するけど。

僕は教訓を与える、
ミステリーと
目まぐるしい発見
に溢れたばかげた
ストーリーを
期待していた。

ただ、母も
小さい卑怯な
夢想家だった
と分かった。

そして、母は
いかによく
自分の翼の
世界に生きて
いたかも
わかった。

想像や夢は素晴らしかったけど、
行動は恐ろしかった。

君と二人で
残ってたから
厳しかった。

でも、
翼で身を
隠したり、

更に君を翼の
下に抱いたり
することはまっ
たくできない。

そこで、
僕は翼を外
して卒業式ド
レスの箱に入
れてから、

全てが
流される
ようにな
った。

一方、ハンガー
にかかっていた
ドレスはガに食
われた。

でも、僕は君
に同じのことに
遭ってほし
くない。

この世には翼
より100倍素晴
らしい物、翼の
付いた人が創造す
る物がある。

母はティーを入れて、僕はアンズケーキをカットした。



母と僕はキッチンにいた。



我々は笑ったり、軽く悲しんだり、しゃべったり、黙ったりしていた。

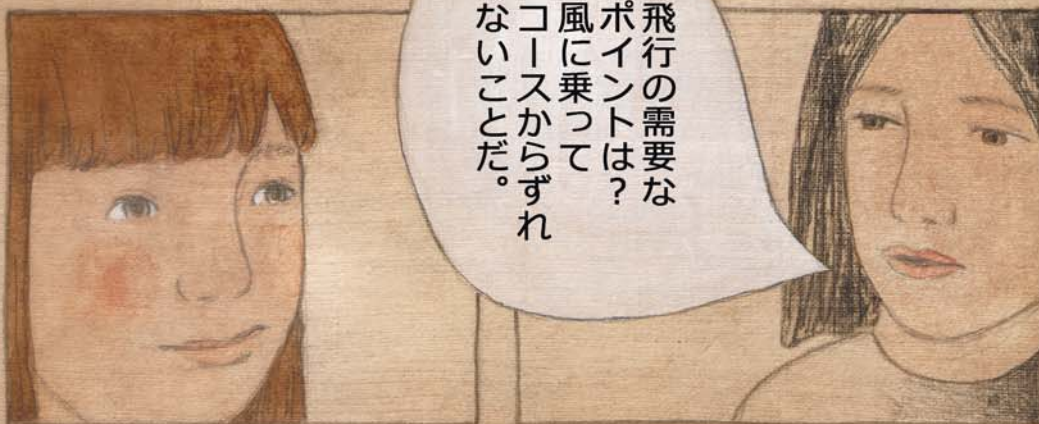
母は仕事のことを考えておらず、僕もいつぱい笑っていた。

僕の後ろの翼は楽しく振るっていた。



飛行の必要なポイントは何？
風に乗ってコースからずれないことだ。

母の翼は極めてきれいだったけど、僕の翼もちゃんと劣っていた。



僕は周りの物事に気づくことが重要と分かって、簡単なものから始めることにした。

私は翼の箱を閉めた。



